

社会に仕える②

- 1) 自分にとって、今の学校や職場が、いろいろな問題があっても、そこに居続けようと思っているのはどうしてですか？反対にやめようと思っているならば、それはどんな理由ですか？
- 2) 自分が、職場や学校で言われたことに対して、「これをやったら、神に逆らうのでは？」と思う一線は何ですか？

「勇気をもって」ダニエル書 1 章

- 1) 神に置かれた状況
- 2) 世との接触
- 3) 主に従う決意

1A 異教の中の生活 1-7

1B 主による捕囚 1-2

2B 王に仕えるための養育 3-7

2A 失われない信仰 8-16

1B 心定めるダニエル 8-14

2B 主の助け 15-16

3A 世への証し 17-21

本文

私たち「社会に仕える②」で取り組みたい内容は、「勇気」です。この世の中で生きる勇気、キリスト者として胸を張って生きることのできる勇気です。そこでこれから、ダニエル書1章を中心に、ダニエルの勇気ある生涯から学びます。

1A 異教の中の生活 1-7

1B 主による捕囚 1-2

1:1 ユダの王エホヤキムの治世の第三年に、バビロンの王ネブカデネザルがエルサレムに来て、これを包囲した。1:2 主がユダの王エホヤキムと神の宮の器具の一部とを彼の手に渡されたので、彼はそれをシヌアルの地にある彼の神の宮に持ち帰り、その器具を彼の神の宝物倉に納めた。

時は、ユダの人々がバビロンに捕え移される紀元前 605 年のことです。バビロンという国が、メソポタミア地方、今のイラン南部から台頭していました。バビロンというのは、天地創造から深いかわりのある地方です。エデンの園には、四つの川が流れていましたが、その一つはユーフラテス川とティグリス川です。バビロンのあったところです。そして、そこに蛇が表れて、エバを惑わして、アダムに罪を犯させたところでした。イザヤ書 13 章と 14 章には、バビロンの王に対する裁きが書

かれています。その背後には、明けの明星、ルシファーがいて、それが悪魔であることがはっきりしています。そして、ノアの時代の洪水の後、人々はシヌアル地方、バビロンのところに来ました。そしてそこに、天に届こう、自分たちの名を馳せようとするバベルの塔が建てられたのです。その町を作ったのは、創世記 10 章によりますと、ニムロデという人です。権力をもって、国々を制覇する主に対抗する者でありました。そこから、天の星座を占う宗教が始まり、偶像礼拝が始まりました。そして、その地方のウルという町に住むアブラムが、「父の故郷を離れて、わたしの示す地に行きなさい。」と言われ、それでアブラハムが今のイスラエルへと移住し、そこが約束の地であると主が語られました。ですから、バビロンはこの世そのものであり、神や神に関する事柄に対して反抗し、対抗するものの象徴でありました。

その同じ地域から、ずっと後に新たにバビロン国が出てきました。当時の帝国アッシリヤを倒して、その地域一帯を制覇していき、イスラエルとその周囲の国々にまで、実にエジプトにまで南下して、征服していきました。そして巨大な世界帝国を築くことに成功したのです。バビロンについて、ユーチューブでCGによって当時の様子を再現した映像がありますが、とんでもない栄華に満ちています。世界の七不思議にされた、空中庭園もそこにあり、ユーフラテス川がその真ん中を通り、頑強な防備と富がそこに蓄積されていました。しかし、偶像礼拝が濃厚に行なわれていて、その富と栄華と共に忌まわしい行ないも慣わしとして行なわれていました。私たちの信仰生活と似ていないでしょうか？ 国としては先進国、経済大国である日本ですが、完全な、多神教の異教社会であります。ですから、偶像に仕えさせるような制度があり、絶えずその緊張の中に暮らしています。

その国に、ダニエルと三人の友人が捕え移されていきました。具体的には、ユダの国から人々がバビロンに捕え移される捕囚は、三回ありました。ここに書き記されているのは、第一次捕囚のことです。この時、ネブカデネザルが死んだ父の跡を継いで王になったばかりの時ですが、ユダに来て、エルサレムの神の宮の中にある器具の一部を運び出しました。そして、2 節にあるように、自分の神の宮に持ち帰ったとあります。「自分の神」というのは、バビロンの神でマルドクという名前でした。天地万物の神、ヤハウエなる方の宮にあるものが、異教の神々の宮の中に移されたのです。

そして、ここで注目していただきたい言葉は、誰がこのことをしたのか？ ということでもあります。もちろんネブカデネザルがしたといえばそれまでですが、「主が」そのことを行われたということが書いてあります。列王記第二 24 章には、そのことが詳しく書かれていますが、エルサレムでユダの王マナセが、偶像礼拝を行ない、しかも神殿の中で行ない、生まれて来た赤ん坊を火の中にいけにえとして捧げるといふ忌まわしいことを行ないました。主がその時に、エルサレムに裁きを下すことをお決めになったことが書かれています。ですから、エルサレムの中にあるものを取り去ったのはネブカデネザルですが、そこに神さまの主権があつて、そのことをお許しになられたのです。

私たちは、どこかで「このような環境であれば、主がそこにおられて、そうでなければ、主から離れている。」というような意識をどうしても持ってしまいます。自分が快適でいられる環境がこれだ、というものを持っていて、それでそこから離れると主ご自身もおられないのではないかと感じてしまうのです。いいえ、多くの場合、主がそこに置いておられるのです。主が呼び出され、そこにいるようにされたのです。ヨセフのことを思い出してください。兄たちによって、エジプトに売られました。これが、どうして主がなされたことだと思えるでしょうか？けれども、ヨセフは主が共におられることを知っていました。だから、自分の主人ポティファルの家が栄えました。そして、主人の妻と共に寝るように言い寄られても、「神を恐れる者である」と言って、そこ場から逃げることができました。彼は後にエジプトの総理大臣となり、パロからエジプトの宗教の祭司の娘を妻として与えられました。かなり異教的ですね。

しかし、それでも彼は主を忘れていませんでした。息子二人が生まれた時に、それぞれ「神が私のすべての労苦と私の父の全家を忘れさせた。」「神が私の苦しみの地で私を実り多い者とされた。(創世 41:51-52)」という意味の名を与えたのです。そして、兄たちに自分がヨセフであることを明かした時に、こう言ったのです。「神はいのちを救うために、あなたがたより先に、私を遣わしてください」(45:5)そして父ヤコブが死んだ後には、「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのために計らいとなさいました。(50:20)」と言ったのです。主がエジプトにヨセフを遣わしておられたのです。そして、兄が彼を売るというところに、主はご自分の御心を置いておられたのです！ダニエルも同じでした、バビロンに自分が今いるのは、ネブカデネザルが自分を引っ張ってきたのではなく、紛れもなく主ご自身がここにお遣わしになったからだという召命、確信があったからです。

主イエスは、昇天される前に、私たちに国々をご自身の弟子としなさいと命じられました。その国々とは、福音が伝わっていないところ、神を知らない人々が住むところです。自分がクリスチャンとして生きるのは苦しいところだ、主がそこにはおられないのではないかと感じる所があります。けれども、その感覚は間違っています。そこにこそ、主がおられるのです。イエス様は言われました。「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいる。(マタイ 28:20)」主は、神を知らない人々の間に私たちをそれぞれ、遣わし、そこに置き、そして「わたしはいる」と宣言しておられるのです。

「イエスが主であるというアイデンティティー」

ところで、私たちキリスト者が、この世の中に生きています。この世の中に生きていて、その中で、他にいろいろ大切にすべきことがある中で、それでも「イエスが主です」と言い表して、キリスト者になりました。いろいろな神々がいる中で、この方も素晴らしい教えを持っているから、愛を持っているから、だから信じた、ではなくて、「イエスは、私の罪のために死んだけれども、死者の中から甦られました！この方こそが、私をそして世界を罪と破壊から救う、唯一の方として信じ、受け

入れます。」として、信じました。ですから、神に対して反発して、反抗する世において、それでも神の選ばれたキリスト、この方が唯一の救い主であり、主であると告白してやまない者たちです。

そこで、みなさんと一緒に考えたいなあと思うのは、「アイデンティティー」という言葉です。アイデンティティーは、「自分は一体何者なのか？」ということをはっきりさせるものです。海外で生まれ育った、という人であればすぐに分るでしょう。あるいは、両親や片親が外国人だ、という人も分かるかもしれません。私は、かつてとてもアメリカに憧れて、それで実際に住んだのですが、住むと「自分がいかに日本人であるか」を嫌になるほど思わされました。それで帰国したのですが、今度は日本というものに合わなくなっている自分を発見しました。それで日本が嫌になりました。けれども、その後で、長期に海外で宣教活動をしました。その間に、その国が好きになっただけでなく、神さまが日本を愛しておられることが分かってきました。それで今に至ります。自分が誰であるか、ということを決めるのがアイデンティティーです。これがしっかりと定まると、心の中の葛藤が少なくなり、相手との違いを認めることができるようになります。異なることで葛藤することなく、その違いを認めて、受け入れ、愛することができます。

そしてアイデンティティーは、霊的な領域にも及びます。この中には、クリスチャン一世の人もいるでしょうし、二世や三世の人もいることでしょう。二世以上の方は、必ずそのことで悩み、そしてはっきりした時に、初めて自分がキリスト者であるという意識があることでしょう。私は一世なので、そのことがよく分かりませんでした。自分は長男なのですが、先祖の墓についても心の中で整理してそれで19歳の時にクリスチャンになることに決めました。だから、異教の生活があって、その中から出て、イエス様に従っていますとなっていますから、単純です。けれども、自分がイエス様との関係がさほどはっきりしていないのに、環境だけは信じている人たちのためのものになっているので、そこで自分は一体何なのか、ということで悩むのだと思います。しかしそこで、意識的に「それでも、私はイエス様を選びます。この方が私にとって主です。」と決めたのだと思います。そうしたら、自分の置かれている環境についても、受け入れることができるし、ある時は赦すこともできるでしょう。

もし私たちが、私たちの主イエス様のアイデンティティーを知ったら、楽になることができます。この方は、父のふところに永遠の昔からおられた神の御子でした(ヨハネ 1:18)。イエス・キリストは父なる神の独り子であり、永遠の昔から神とともにおられた方であり、神ご自身でした。しかし、この方は世に遣わされました(1:14)。神の身分でありながら、それで肉体を取られて人となられたイエス様です。イエス様は父なる神との深い交わり、関わりがあったので、むしろ人となられても、それによって「わたしは神であるべきか、人であるべきか」という葛藤はなかったのです。神でありながらにして、いや父なる神と一つであるからこそ、人々と一つになって、人々の中に住みながらにして、父なる神を現すことができになったのです。そしてイエス様はキリスト者に対して、「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。

(20:21)」と言われました。イエス様につながれた者として、つながれているからこそ、この方が自分にとって主となっているからこそ、神に対抗している世に住んでも、その中であってイエス様が自分から現れてくださるのです。証しを立てることができます。

2B 王に仕えるための養育 3-7

1:3 王は宦官の長アシュペナズに命じて、イスラエル人の中から、王族か貴族を数人選んで連れて来させた。1:4 その少年たちは、身に何の欠陥もなく、容姿は美しく、あらゆる知恵に秀で、知識に富み、思慮深く、王の宮廷に仕えるにふさわしい者であり、また、カルデヤ人の文学とことばとを教えるにふさわしい者であった。1:5 王は、王の食べるごちそうと王の飲むぶどう酒から、毎日の分を彼らに割り当て、三年間、彼らを養育することにし、そのあとで彼らが王に仕えるようにした。1:6 彼らのうちには、ユダ部族のダニエル、ハナヌヤ、ミシャエル、アザルヤがいた。1:7 宦官の長は彼らにほかの名をつけ、ダニエルにはベルテシャツアル、ハナヌヤにはシャデラク、ミシャエルにはメシャク、アザルヤにはアベデ・ネゴと名をつけた。

ここで、ダニエルとその友人が徹底的なバビロン教育を受けている様子が書かれています。ダニエルや友人たちが捕え移された目的がありました。それは、バビロンがユダの地方を支配して治めるために、同胞の民をバビロンの僕にすることによって治めようという政策です。もはや、ユダという独立国ではなく、バビロン国のユダ州にする意図がありました。そこでその地域を、ユダヤ人本人によって管理させるのが良いと考えて、その役人を作るために若い彼らを連れてきたのです。

政治について取り扱いますから、バビロンは王族や貴族から選抜しました。そして知的にも、人格的にも優れた者でなければいけません。そして身体的にも見た目がよい者を選んでいきます。容貌は、異邦人たちには指導者として大切な資格でした。サウルがイスラエルの王に選ばれた時、彼が非常にハンサムで背が高かったことを思い出してください(1サムエル 9:2)。これは異邦人の国々が王やその側近に求めた資質です(1サムエル 8:5 参照)。そのため、教育だけではなく食べ物も王が食べる物と同じものが割り当てられたのです。肉体の育ちも良くするためであり、体をもってバビロンの王に仕えるにふさわしいものにするためです。ですから、心だけでなく体までがバビロン化されました。

そしてバビロンの言葉や文学も習得させられます。これも人のアイデンティティーを決めるのに、非常に重要になります。言葉がその人の人格形成に果たす役割はとても大きいです。言葉に、その文化や歴史、習慣や考え方の全てが詰まっているといっても過言ではありません。それを徹底的に学ばせることによって、彼らはますますバビロン人のようにさせられていきました。

そして名前の変更は、とても大きな力を持っています。まずユダヤ人名を見ると、そこに両親の信仰深さを垣間見ることができます。ダニエルは「神は裁き主」です。ハナヌヤは「ヤハウェは恵み

深い」です。ミシャエルは「神である方は誰か」です。そしてアザルヤは、「主は助けられる」です。彼らが親によって幼少の時に、イスラエルの神を敬うように教えられてきたことが分かります。ところが、新しい名前はすべて非常に異教的なものです。「神は裁き主」であるダニエルは、「ベルテシヤツアル」で「ベルのご加護を」という意味です。ベルはバビロンの神です(イザヤ 46:1)。「ヤハウエは恵み深い」のハナヌヤは、「シャデラク」つまり、バビロンの太陽神「ラク」を指し、「太陽神の光を受ける」という意味です。「神である方は誰か」という意味のミシャエルは「メシャク」で、「アクである方は誰か」です。イスラエルの神から異教の神アクに摩り替えられました。そして、「主は助けられる」のアザルヤは、「アベデ・ネゴ」です。これは「ネボのしもべ」です。ネボは、バビロンの神ベルの息子と考えられています(イザヤ 46:1)。名前が変えられるということは、とても強烈です。自分がどこに属しているのかを決めるものです。

このように、彼らはあらゆる面でバビロン化されていきました。しかし、彼らはこれらのものによって、自分たちが主に仕えるという信仰を失っていなかったのです。むしろ、すべてのことは主が行われているのだということを知っていたので、他に自分を規定していたものが、剝がされても、それでも、ただ主に仕えているという意識と確信しかなかったのです。例えば、考えてみましょう、親の都合で、全く違う地方に転勤になったとします。そしてこれまで通っていた、慣れ親しんでいた教会とは全く雰囲気の違いの違う教会に通うとします。それでも、イエス様がそれを行われたのだという確信があれば、その違いの中にもこれまでと同じ神の働きを認めることができます。自分が社会に出たとします。学生生活から、まったく違う環境に入ります。そして、これまで主がおられると思っていたものが、全くない世界であることに気づきます。けれども、主がそれをされていることに気づけば、そこに主がおられ、今まで勝手に、「このような状況であれば神がおられる」という、思い込んでいた部分を捨てることのできるのです。

2A 失われぬ信仰 8-16

1B 心定めるダニエル 8-14

1:8 ダニエルは、王の食べるごちそうや王の飲むぶどう酒で身を汚すまいと心に定め、身を汚さないようにさせてくれ、と宦官の長に願った。

ここがダニエルの勇気の最も大きな特徴となるでしょう。「心に定める」ことです。新共同訳では、「決心した」とあり、口語訳では「心に思い定めた」とあります。王の食べるごちそうには、神が律法の中で定めておられた食物規定に反するものがありました。例えば「血を食べてはならない(レビ記 17:12)」とあります。血抜きをしていない肉の料理が出ていたかもしれません。反芻しない動物、例えば豚も食べてはいけません(同 11:7)。豚肉も出ていたかもしれません。さらに、これらの食べ物が、食卓に出てくる前に偶像にささげられていた可能性は大です。当時は、食事をまず偶像にお供えしてから食膳に持ってきます(1コリント 10:28)。ですから、ダニエルは名前が異教的なものに変えられ、バビロン文学の授業を受けても、この食事だけはいただくことはできないと心で思い、

死んでも食べないことに決めたのです。

このようにダニエルとその友人は、バビロンの習慣や言葉、また名前も与えられましたが、自分の所属をバビロンとは考えていませんでした。あくまでも主のゆえに、バビロンに仕え、王に仕えました。しかし、それは自分自身が主のものであることを知っているからであって、主との交わり、主への礼拝という、ある意味で、私的な霊の部分に、外から汚そうとするものがあれば、それを拒まないといけないということです。そして彼は年老いても、そのことをわきまえていました。メディア人の王ダリヨスの時に、彼の像以外に拝むことをここ 30 日間すれば、獅子の穴に投げ込まれるという法令に、王が署名したことを知っても、彼はいつものように、エルサレムに向かって開かれた窓のところで、主に感謝を捧げ、祈ったのです。ここに彼の変わらない、忠実な、そして外の動きに左右されない心が描かれています。自分は主によってバビロンに置かれているけれども、だからバビロンに仕えているけれども、主にあって仕えているのだ、実際は主に仕えているのだということを知っていました。

新約聖書の使徒たちの手紙には、「従いなさい」という言葉が数多く出てきます。主に従うことはもちろんのこと、家族において、雇用において、また社会において従うことが命じられています。しかし、その一つ一つの命令には必ず、「主にあって」とか、「主に従うように」という言葉があります。エペソ 5 章 22 節に、「キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。」とあります。主を恐れ尊ぶからこそ、従います。主に従うように、妻が夫に従いなさいとあります。そして、子どもたちは、神が「父と母を敬いなさい。」と言われるから、従いなさいと命じています。そして奴隷たちにも、「キリストに従うように、恐れおののいて、真心から地上の主人に従いなさい。(6:5)」と教えています。そしてセッション1で見ました、社会や国の権威に対しても同じです。

ところで、王の食事を食べるのを拒むということは、とんでもない、とてつもない決断です。王に逆らえば、そのまま死刑になっても全くおかしくない中にありました。王が言ったことはそのまま法律になり、刑罰が課せられました。2 章を読めば、夢を解き明かすことのできない者たちは、「手足を切り離せ、家を滅ぼしてごみの山とさせる」とネブカデネザルは言っています(5 節)。しかし、ダニエルはたとえそうであっても、心では主に従うと決めていたのです。

心に決めること、献身することを述べているのが、ローマ 12 章です。「12:1-2 そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」

一つに、自分自身を「**生ける供え物**」とすることです。もう主に捧げるのだ、と決めてしまいます。実は、ここにおられる皆さんの多くが、そのように決めておられます。主イエスが、私たちのためにご自身の体を父なる神に捧げてくださいました。そこにある神の憐れみにしたがって、私たちが主に、全ての事を任せてしまうのです。結婚後、何か合わないことがあって、「この結婚は果たして御心だったのだろうか？」なんて悩むなんてことしますか？その迷い自体が、結婚という意味を弁えていないですね。結婚の誓約において、「その健やかなるときも、病めるときも、富めるときも、貧しきときも、死が二人を分かちときまで、命の日の続く限り、あなたの妻(夫)に対して、堅く貞潔を守る」と同意しているのですから、そんなバカバカしい話はありません。そのように、イエス様に仕えることを決めてしまいます。

次に、「**この世と調子を合わせてはいけません。**」であります。この調子を合わせるというのは、型にはまるという意味があります。バビロンという文化や制度の中で、その型にはまっただけとはいかない、といいます。私たちは、信仰を持つことは、一つの信仰生活、教会生活の型にはめられることを言うのか？と疑問に持つかもしれません。いいえ、キリスト者になることは、内側から変わることを意味しますが、外側から変わるように圧力をかけることではありません。むしろ、この世というのが、絶えず、神のかたちに造られた人、その自由人を型にはめるべく、強い圧力をかけています。私たちは、そうした世の流れがあまりに当たり前になっているので、まさか型にはめられているとは思っていないでしょう。福音と、世のもたらす型との違いは明白です。世の調子は、「これこれをやらないと、罰せられるのではないか」という恐れが先立ちます。強制力が働きます。けれども、福音は、「神がこれだけのことをしてくださったから、その命令に従いたい」という愛の動機に基づいています。

そして、「**心の一新によって自分を変えなさい。**」とありますね。この「心」は正確には、「思い」です。自分の思っていることを、何が良いこと、何が神に受け入れられ、完全なことなのかを弁え知りながら、思いを変えるのです。これは、内側から変えられることです。新しくなった思いによって自分を変えていきます。ここには、極めて主体的で、能動的な営みがあります。主に従うことは、とても創造的なことです。生き生きとしていることです。主に従うこととは、どういうことかを、祈りの中で主体的に考えます。イエス様の恵みによって成長するにしたがって、主が自分に何を御心に行っているかを知ることができます。大事なものは、主に自分の全てを明け渡し、信頼していることです。

1:9 神は宦官の長に、ダニエルを愛しいつくしむ心を与えられた。1:10 宦官の長はダニエルに言った。「私は、あなたがたの食べ物と飲み物とを定めた王さまを恐れている。もし王さまが、あなたがたの顔に、あなたがたと同年輩の少年より元気がないのを見たなら、王さまはきっと私を罰するだろう。」1:11 そこで、ダニエルは、宦官の長がダニエル、ハナヌヤ、ミシャエル、アザルヤのために任命した世話役に言った。1:12 「どうか十日間、しもべたちをためしてください。私たちに野菜を与えて食べさせ、水を与えて飲ませてください。1:13 そのようにして、私たちの顔色と、王さまの

食べるごちそうを食べている少年たちの顔色とを見比べて、あなたの見るところに従ってこのしもべたちを扱ってください。」1:14 世話役は彼らのこの申し出を聞き入れて、十日間、彼らをためししてみた。

ここから、ダニエルの生涯でとても大事なもう一つの側面があります。それは、「神の知恵」と言ったらよいでしょう。王に仕えるということがあり、けれども、主に彼または友人たちは仕えています。しかし、王が主の命令に反することを命じる時に、主を選びます。しかし、それをやみくもに反対するではありません。むしろ、その権威者に寄り添うような形でそのことを行なったのです。

そしてここでは、「神は宦官の長に、ダニエルを愛しいつくしむ心を与えられた。」とあります。ダニエルに対して神が、恵みと憐れみを与えています。私たちが神を主として、この方に明け渡すのであれば、主が責任を取ってくださいます。自分を主のものとすることによって、主が全てのことを私たちのために動かしてくださいます。聖書には、異教の王などに好意を与えてくださる神の働きを見ます。ヨセフは、主人ポティファルによって、監獄に入れられましたが、「主はヨセフとともにおられ、彼に恵みを施し、監獄の長の心にかなうようにされた。(創世 39:20-21)」ネヘミヤが、ペルシヤ王アルタシャスタの献酌官であった時に、エルサレムに一時帰還する申し出をしましたが、王はそれを許しました。「私の神の恵みの御手が私の上にあったので、王はそれをかなえてくれた。(2:9)」主は、王の心や、上に立つ人々の心を、ご自分の思われるままに動かされます。

ダニエルは、宦官が王に逆らうことによって自分の命が危ないことを知り、そうではない方策を練ります。宦官の下で働く、直接、食事に関わっている世話役の人に、野菜だけの食事を、十日間だけ与えてくれと頼みます。ここに信仰が必要です。主は自分たちに悪いことはしない、自分たちが主に従うことのできる力を与えてくださると、主に信頼するのです。十日間というのは、試される期間として聖書に出てきます。例えば黙示録 2 章に出てきます。サルデスにある教会が、牢に投げ入れられて、「十日間苦しみを受ける(10 節)」とイエス様は言われました。これは、その信仰の真価が試される時でもあります。自分の決めたことが、果たして真実な決断であったのかを試されます。このことで、ますます主ご自身だけにより頼むことが見えてきます。

2B 主の助け 15-16

1:15 十日の終わりになると、彼らの顔色は、王の食べるごちそうを食べているどの少年よりも良く、からだも肥えていた。1:16 そこで世話役は、彼らの食べるはずだったごちそうと、飲むはずだったぶどう酒とを取りやめて、彼らに野菜を与えることにした。

ここに主の恵みがあります。ダニエルは主のゆえに、自分を不利な状況に敢えて置きました。そこに主が働かれ、彼らをさらに肥えさせました。しかし、その弱さの中に主の恵みが表れます。私たちは、自分の強さの中でさらに強くなれるように願いますが、いいえ、弱くされているところにキ

リストの恵みがあり、そして強くなれるのです。

3A 世への証し 17-21

1:17 神はこの四人の少年に、知識と、あらゆる文学を悟る力と知恵を与えられた。ダニエルは、すべての幻と夢とを解くことができた。1:18 彼らを召し入れるために王が命じておいた日数の終わりになって、宦官の長は彼らをネブカデネザルの前に連れて来た。1:19 王が彼らと話してみると、みなの中でだれもダニエル、ハナヌヤ、ミシャエル、アザルヤに並ぶ者はなかった。そこで彼らは王に仕えることになった。1:20 王が彼らに尋ねてみると、知恵と悟りのあらゆる面で、彼らは国中のどんな呪法師、呪文師よりも十倍もまさっているということがわかった。

三年間の養成プログラムが終わりました。その後、四人は王の前に連れて来られました。なんと、彼らは他の知者たちよりも、十倍もまさっていました。当時のバビロンは、学問が天文学や星占いと深く結びついていたので、ここにあるとおりの呪法師、呪文師とありますが、つまりシンク・タンクのような国の指導者の顧問であり、学者集団でした。その出所を、ダニエル書は明らかにしています。17 節「神は・・・」ですね。後にネブカデネザルはダニエルに、「聖なる神の霊があなたにあり(4:9)」と言っています。御霊が賜物として彼らに、その能力を与えられたのです。

私たち人間には天賦の才能が与えられています。天才と言われる学者もおり、芸術家、歌手など、初めから備わっている能力があります。けれども、それらと神が与えられる賜物は違います。ダニエルは、2章でネブカデネザルの見た夢の解き明かしを行ないます。それは、バビロンの王のために行なったことではありません。神々と呼ばれる偶像ではなく、天に神がおられることを証しするためにその能力を用いました。このように、神に関する事柄、神に栄光が与えられるようなものだったからこそ、神はダニエルに際立った解き明かしの能力を与えることで、ご自分を証しできると思い、それでその賜物を与えておられたのです。会社や学校での能力が上がるようになる、という問題ではありません。

1:21 ダニエルはクロス王の元年までそこにいた。

ここからダニエル書は、列王記第二また歴代誌第二と、エズラ記をつなぐ書物であることを知ります。そして、イザヤ書 39 章から、クロス王についての預言が始まる 40 章以降をつなげる書物であることがわかります。紀元前 586 年、ゼデキヤが王であった時にバビロンがエルサレムを破壊しましたが、ペルシヤが 539 年にバビロンを倒しました。そしてペルシヤの初代王クロスが、ユダヤ人に対してエルサレムに帰還して、神の宮を建てなさいという命令を發布します。その時までダニエルはバビロンの町にいました。その間、つまり、ユダヤ人が約束の地から引き抜かれていた間、神はダニエルをご自分の証人に立てて、続けてご自分の働きを行なわれていたのです。